

聖書：マタイ 6：11

説教題：日ごとの糧を

日時：2018年7月29日（朝拝）

今日の11節から「主の祈り」の後半に入ります。これまで見て来たことは、主の祈りの前半はまず神の栄光を求める祈りであるということでした。これがキリスト教の特徴でした。その世界観は人間中心ではなく、神中心であるということです。何にもまさって素晴らしい神がまず賛美され、その御心が行われることが祈られるべきである。そうした後で私たち人間の必要に関する祈りが来ます。さて、だからと言って私たちはいよいよここから自分たちのことが祈れると思って、俄然やる気を起こすというようになってはなりません。それだとこれまでのことは形式的な手続きになってしまいます。そうではなく、先に神の栄光に関する祈りを祈った私たちは、そのことに第一の関心を持っている者として、それとのつながりの中で私たちに関する祈りも祈るのです。

その私たちに関する第一の祈りは、「私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください」というものです。ここで「糧」と訳されている言葉は、直訳すれば「パン」という言葉です。初めて主の祈りを学んだ人はここでビックリするかもしれません。これまで神の栄光を求める高尚な祈りが続いて来たのに、ここで一転して私たちの胃袋の世界のことが祈られます。これはあまりにも急降下し過ぎではないのか。そこでかつての人々は、このパンとは霊的なパン、すなわちみことばのことではないかと考えました。霊の糧である神のみことばを毎日私たちに与えてくださいという祈りとして。またある人はパンはパンでもこれは聖餐式のパンのことではないかと考えました。すなわち聖餐式を通して私たちを祝福して下さいという祈りとして。しかしやはりこれは現実のパンのための祈りです。ここに大切なメッセージがあります。それはキリスト教信仰においてパンを食べることは次元の低い話ではないということです。私たちは聖書を読むことや祈ることや奉仕をすることは信仰的な事柄だが、食べることはそれと関係がない世俗的なことだと考えがちかもしれません。しかしそうでないことは次の一つの御言葉を思い起こしてみても分かります。1コリント10章31節：「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」

これは私たちの「霊」と「からだ」の関係について重要なことを示唆しています。私たちの「霊」と「からだ」はどちらがより重要なのでしょうか。世の人々に見える「からだ」の方に特別の関心を注ぎます。どうすれば健康を保てるか、どうすれば若々しく見えるか。コマーシャルなどはそういった宣伝ばかりです。そのような世に対してクリ

スチャンは「霊」の重要性を主張します。しかしそのあまり、逆にそこに起こりがちなのは「からだ」に関わることをより次元の低いこととして軽んじてしまうことです。神は人間を「霊」と「からだ」の両方を持つ存在として造られました。その両方があるって初めて本当の人間であり、やがての救いも霊ばかりでなく体にも関わるとというのがキリスト教のメッセージです。それと一致して今日の主の祈りが示しているのは、神は私たちの「からだ」に関することにも深い関心を持って下さるということ。ですから私たちはこの日々の糧の問題も、神の前での立派な信仰のテーマと捕らえて、正しい道を進んで行きたいのです。

以下、この祈りを3つの部分に分けて見て行きたいと思います。まず一つ目に注目したいのは「お与えください」という言葉です。ある人はここに違和感を覚えるかもしれませんが。私にはこのように祈る意味が分からない。私は自分で自分の全生活を成り立たせている。食べ物に困っている人がこう祈るのは分かるが、なぜそうでない私がこんな祈りをしなければならないのかと。しかしこの祈りが教えていることは、たとえそうであっても、自分が得た糧は神が私に与えて下さったものとして捕らえ直すべきであるということです。よく一家の主人は、自分が大切にされていないと思うと、こう言います。「誰のおかげで飯が食えると思っているんだ！オレにもっと感謝しろ！」。そうやって自分の重要性をアピールしたい。確かに私たちが食べていけるのは、働いて稼いでくれている人がいるからです。ですからその人に感謝するのは正当なことであり、良いことです。また食事を食べられるのはお金があるだけでなく、それを料理してくれる人がいるからであって、それを作ってくれたお母さん、その他の人々に感謝することも正当であり、良いことです。また世でよく言われますように、「ご馳走様」という言葉には、その食事のために多くの人が走り回ってくれたことへの感謝が表されています。料理を作る人が買い物などのために走ってくれただけでなく、作物が作られ、市場に出るまでの間にも色々な人が汗を流し、奔走してくれたことへの感謝を持って「ご馳走様」と言うのだと。確かにその通りでしょう。しかしそこまで行くなら、そこで止まらないでもっと先まで行くべきではないでしょうか。すなわち、その食べ物が私の口に届くまでのすべてのことを調整し、私を養って下さる神にこそ究極の感謝がささげられるべきではないでしょうか。いくら私たちが働いて生活費を稼いでも神が天候を支えて下さらなければ食べ物は取れません。また流通のシステムがどこか狂えば、遠い地域や国の食材は私たちのところまで届きません。また政府によって治安が維持されていなければ安心して食べ物を手に入れることはできません。こうした神の守りと導きを通して私の前に食事が届けられていることを思い、私たちは私たちが養って下さる神にこそ目を上げて感謝し、日々信頼する歩みをするのが大切なのではないのでしょうか。

このことはこの福音書の4章に記された荒野における悪魔の誘惑の記事とも関係します。あの時、悪魔はイエス様に近づいて来て、「あなたが神の子なら、これらの石がパンになるように命じなさい。」と言いました。それに対してイエス様は「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる』と書いてある」とお答えになりました。あの時、サタンは簡単に言えば、イエス様に対して、もう神には頼らず、自分でパンを得て生きて行け！とけしかけました。神から独立して自分に食べさせよとの勧めです。それに対してイエス様は、パンは必要だが、それは神の一つ一つのことば、すなわち神のご意志によって、言い換えれば神の摂理に信頼して受けて行くことが大事だと言われたのです。ここにパンの受け取り方に二つの道があることが分かります。一つはイエス様のように、パンを神の導きによって受け、また神に感謝するというあり方。もう一つはサタンの提案のように、神と切り離してパンを求め、それを手に入れ、神を忘れ、神を捨てるという生活です。もし私たちが毎回の食事にありつきながら、それを神からのものとして感謝せず、自分の力で自分に食べさせているように思っているなら、それはまさにサタンの提案に沿って歩んでいることにならないでしょうか。

私たちは決して見える食べものそのものに私を養う力があるかのように思うべきではありません。食べ物がカロリーを持ち、栄養を私たちに与えることができるのは、神がそう意志されているからです。逆から言えば、神の意志されなければ、それは何にもならないのです。旧約のダニエル書に、ダニエルと3人の少年たちが異教社会で身を汚すまいとして、食べ物として野菜と水だけを求めたところ、10日間経っても他の立派なご馳走を食べたどの少年よりも顔色が良く、からだも肥えていたとあります。神はしようと思えば、野菜と水からだけでも十分な栄養を取れるように彼らを導くことができるのです。一方、どんなに豊かなご馳走にありついても、神がそれを祝福して下さらなければ、それらは私たちに良い効果をもたらさないばかりか、かえって病気をもたらすこともあります。ですから私たちは食べ物それ自体が私にいのちを与えるかのように考えるのではなく、それらに力を与えるのは神であることを見上げて、神がその食事を祝福して下さるようにと祈り、感謝していただくべきです。その時、私たちは何と素晴らしい世界に生きることになるでしょうか。私が私に必死に食べさせているのではないのです。神が私の食べ物のことまでも心にかけて、状況を整え、養ってくださっている。私たちは実際の食事を楽しみ、味わうと同時に、そこに示されている神の愛・真実・いつくしみをも味わうのです。こうすると食事立派に信仰の世界の事柄であることが分かります。私たちはこうして食事のたびごとに神に感謝し、一層神の恵みに答えて歩むようにと駆り立てられることができるのです。

2つ目に注目したいのは「日ごとの糧を」という部分です。そこには印がついていて、欄外に別訳が示されていますが、どれが正確な訳なのか確定できていない言葉のようです。と言うのもこれは主の祈り以外には一度も出て来ない言葉だからです。しかしどれであるにせよ共通して言えることは、これは一度に全部を求める祈りではないということです。必要な分だけ、その日その日の分を神に求める。神はこのことをあの有名なマナの奇跡を通して教えてくださいました。荒野を旅するイスラエルにとって食事を確保することは絶望的なことでしたが、神はマナという食べ物を天から降らせ、イスラエルを養われました。安息日には集める作業をしなくて済むように、その前日は二日分取って良いが、それ以外の日はその日の分だけを取るようと命じられました。しかしある人は主の約束を信じず、心配になって翌日まで残しておきました。すると次の日、それには虫が湧き、悪臭を放ったとあります。一方、安息日の前日に集めたものは安息日になっても虫も湧かず、臭くなりませんでした。私たちはなるべく遠い先の分まで確保したい、そしていちいち神に頼らなくてもやっていける基盤を作りたいと願いますが、それは不信仰とつながっています。そうではなく、私たちは「日ごとの糧を今日も」と祈り、日ごとに神に信頼し、日ごとに神からの恵みを受け取って生活して行くようにと召されています。

そしてこの祈りは、神が今日与えて下さるものに満足して生きるべきことを私たちに教えるものでもあります。これは贅沢を求める祈りではないのです。私たちの食欲さには限りがありません。誰か他の人がもっと美味しいものを食べている、もっと良い生活をしていると知ると、自分もそれを味わわないと満足できないという不満の心を持ちがちです。しかし食欲は危険です。ルカの福音書 12 章に有名な「金持ち農夫のたとえ」が出て来ますが、彼は自分の畑が豊作になって嬉しい悲鳴を上げ、「今の倉を壊して新しいのを建てよう。そしてそこに取れたものを一杯しまっておこう。これで私はもう大丈夫だ。わが魂よ、さあこれからは安心して食べて、飲んで、楽しめ！」と自分に向かって語った時、神が言われました。「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意したものは、いったいだれのものになるのか。」彼は自分の富が自分をいつまでも守ってくれると思いましたが、それは幻想でした。彼がこの時になって分かったことは、財産が自分を守ってくれるという考えは誤りだったということ、自分は間違った道を進んで来てしまったこと、自分にとって最も大事な関係は神との関係だったということです。箴言 30 章 7~9 節：「二つのことをあなたにお願いします。私が死なないうちに、それをかなえてください。むなしいことと偽りのことばを、私から遠ざけてください。貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で、

私を養ってください。私が満腹してあなたを否み、「主とはだれだ」と言わないように。また、私が貧しくなって盗みをし、私の神の御名を汚すことのないように。」 私たちはどん欲に豊かさを求めがちですが、豊かなことは危険なことでもあるのです。ですから私たちはなすべき働きを通して自分に与えられた糧は、神が良い計画をもって私に与えてくださったもののだとして受け取りたいのです。神は信じる私たちを最後の栄光へ導くため、その綿密なご計画のもとに必要な分をもって、ちょうど良いと定めた分量のものをもって、私たちを養っていただきます。私たちは人と比べてつぶやくのではなく、良い考えをもって私を導いてくださっている神を見上げて、与えられたものを感謝し、満足する歩みをしたい。テモテへの手紙第一 6 章 6 節：「しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそが、大きな利益を得る道です。」

最後に 3 つ目に短く見たい言葉は「私たちの」という言葉です。この言葉は私たちに何を意味するのでしょうか。それは私たちは自分のことだけを考えていてはならないということです。他の人々、特に困っている人々のことにも思いを向けるべきということです。今日、格差は益々広がっています。富の配分が適切になされているとは言い難い状況があります。世界を見渡せば多くの貧しい人々が飢餓に苦しんでいる現実があります。私たちがその人たちのことを覚えて祈るのです。その人々の必要が満たされるように。この明らかにアンバランスな状態が解消されるように。富の配分が適切になされるように。そしてもちろん祈るだけでなく、自分がなすべきことは何かを考えさせられ、行動するようにも導かれるべきでしょう。ある人は神によって比較的多く与えられているかもしれませんが。その人は、これは自分の功績だ！と自分に栄光を帰すようなことをすべきではありません。神がある人に多く与え、ある人に少なく与えているのは、そこに愛の交流が行われるためです。喜んで分け与える特権に生きるように！と神はある人には多く与えています。また私は多く与えられていないと言っても、私たち日本人は世界的に見たら裕福な国に入らなんでしょう。私たちは神が与えてくださったものを楽しんで用いて良いわけで、誤った禁欲主義に陥るべきではありませんが、もしかするとこの祈りを祈る中で自分たちの食事は少々贅沢過ぎると思わされるかもしれません。あるいは生活用品についても必要以上のレベルになっている。この分をもう少し節約して、困っている人々に回すべきではないかと示されるかもしれません。それで国際飢餓対策機構等の働きにささげるのもよし。様々な被災者のためにささげるのもよし。あるいは周りで必要を覚えている方々に愛の贈り物をするのもよし。私たちが手にしているものは、この世にある間、一時的に神からお預かりしているものに過ぎず、私たちは賢い管理者であるようにとされています。私たちが自分に与えられ、委ねられているものを、そのように神に喜ばれるように用いるようにともこの祈りを通して導かれるべきではない

でしょうか。

以上、主の祈りの4つ目の祈り。神は私たちの霊ばかりでなく、この肉体に関することも心にかけてくださっていると知ることは何と幸いなことでしょうか。食事に関することも立派な信仰の事柄です。私たちはこの祈りを祈りつつ、自らに与えられている働きに励み、そうして与えられた糧を見る時、テーブルの上の食事を見た時、それを神が私にくださったものとして感謝したいのです。それは神の私への分け前であり、神はそれをもって私を養い、今日も支えてくださる。そしてご自身の最善の計画に生かして下さい。私たちはその糧を無思慮にガツガツむさぼり食うのではなく、そこに示されている神の愛と真実をも味わって御名を賛美したいのです。願わくは食事のたびごとに一層神にある満足と信頼を増し加えられて、いよいよ神の栄光を求める歩みへと、この祈りを通して導かれて行きたいと思います。